

「アマルフィの紙」とは、初対面ではない。

91年の春、三人の友人とミラノ、ヴェネツィアを訪れた。みんな忙しいのに、8日間、なんの仕事も持つていかない旅だった。

いろんな偶然が重なって、

そんな旅ができた。それだけに楽しかった。思い出のなかでは、その楽しささらに増幅され、なんなかの自分自身がついとおしく思えるほどだ。

その旅のヴェネツィアで、友人のひとりがぼくのを「アマルフィの紙」を売る店につれていった。

南イタリアの古い港町アマルフィは、かつてヴェネツィアとなりの都市国家、東方との交易もわからんで、十三世紀初頭、西欧ではいつも耳の紙を作りはじめた。

起源は中国だが、その手

漉きの紙の手触りや佇まい

は、中國とはちがい、西歐

のものである。

なしに使おうかと思いつめぐらす間に、ただただほしくなり、百枚ほど買い込んだ。

次に「アマルフィの紙」

と出合つのはサン・フランシスコ。この街のひとたち

はなかなか面白い好みを持っていますから、こんな凝

ったものが売れるのだろう。

ぼくは、たとえばフィレン

ンツィオの古地図をスキャナ

ーで取り込み、時候の挨拶

といっしょにプリンターで

この紙に刷り込んで、知り

あいに送ったりしている。

手持ちがむづむづなくな

ったので、アマルフィの紙

工場Cartiera F. Amatruda

(Via delle Cartiere, 100-84  
011 Analfi)へハターネ

近藤正一=撮影  
photograph by Shoichi Kondo  
ソリマチアキラ=絵  
illustration by Akira Sorimachi



K.K.氏のいいものみつけ!  
vol.1

# アマルフィの紙

ツトで探し出し、ファックス (001-39-8987-1315) で置く。厚め (12グラム) のものが一枚 (約20cm×25cm)、薄め (8グラム) のものが一枚 (31.5cm×24cm)、クレジット・カードはだめだとこのので、200ドルの現金を送った。

10日ほどして小包が届いた。厚め・薄め、それぞれ三百枚ずつ入っていた。

いい紙を筐底に秘めていふのはなんとも心豊かなことだ……。「アマルフィの紙」あるいはこの「紙」をよく教えてくれる。

